

6. yor-č' i-qun-ya-bu-qun-él-č' i-ne-d·u[l-qa]-qué-----
7. ĵar-liq-----
8. ĵ[i]ŋ-gis-qa-nu-ba-q·a-nu-ba-ĵar-li[q]-[d]ur-do-yid-ér-k' e·ud-sen-šhi-
9. ŋud-daš-[ma]d·'a-li-ba-al-ba-qub-č' i-ri-['e]u-lu·'eu-ĵen-----
10. dĕŋ-ri-yi-ĵal-ba-ri-ĵu-hi-ru·[e]r·'eo-gun·'a-t' u-qayi-g·ek' -
11. deg-sed·'a-ĵu·uĕ-é-du-[·]e-ber-beo·[e]-su-u-ri-da-nu-----
12. ĵar-li-qun-yo-su·ar·'a-li-ba·'al-ba-qub-č' i-ri·'eu-lu·'eu-ĵen-
13. dĕŋ-ri-yi-ĵal-ba-ri-ĵu-hi-ru·er·'eo-gun·'a-t' u-qayi-g·en-[é]-
14. ne-li-tav-k' em-gav-ĵi[n]-žī-nu-o-ro-[t]i-dĕm-[bo]l-ĵu-['š]em-[s]i-u-
15. lu-si-šeu-shi-č' eon-dur-bu-gun-sen-['š]hi-ŋu-[d]i·'eo-t' eo-gu-
16. le-ĵu·'a-t' u-qayi-g·en-li-ti-dĕ[m]-ba-ri-ĵu-ya-[b]u·'ayi-----
17. ĵar-liq·'eog-beĕ-é-de-nu-geuŋ-gon-dur-ge-yid-dur·'a-nu-
18. él-č' i[n]-bu-ba·u-t' u-qayi-k' ed-k' ed-ber-bol-ĵu-k' u-č' u-de-ĵu-
19. bu-sa·u-t' u-qayi-geuŋ-gon-dur-ha-ran-b[u]-ĵar-qu-la-t' u-qayi-qa-nu-
20. ts·aŋ·'a-mu-bu-č' [i]d-qu-t' u-qayi-ya·u-k' e-bu-t' al-bi-[t' u]-qayi-u-l·a-
21. [š]i·u-su-bu-ba-ri-t' u-qayi-ts' aŋ-t' am-qa-bu·'eog-t' u-geĕ-geuŋ-gon-
22. dur·'a-la-qa-ri-ya-t' an-qa-ĵar-u-sun-qu-lud-t' e-gir-med-baq-gey(gĭay)-
23. den-k' u-qa-la·un-u-sun-dem-k' e-bi-de-č' e-šir-ge-k' eo-neor-ge-
24. de-č' e·'a-li-ba·'al-ba-qub-č' i-ri-bu·'ab-t' u-qayi-ba-sa-----
25. bi-da-na-č' a-qa-qar-qayi-ĵar-liq·'eu-ge·un-beo·e-t' e-le·'ayi-ma·ud-
26. da·'a-la-šil-t' a-ĵu-sen-šhi-ŋud-da-č' a-ya·u-ba-qu-yu-ĵu-bu·'ab-t' u-
27. qayi-sen-šhi-ŋud-ba-bu·'eog-t' u-geĕ-ba-sa-sen-šhi-ŋun·'a-li-

御寶

28. ber·'euĕ-les·'a-nu-beo·e-su-é-ne-li-[t]i-dĕm-ĵu-ki-yer-qa-
29. qal-ĵu·'eog-t' u-geĕ-t' a-ber-o-lan-sen-šhi-ŋud-é-ne-li-ti-dĕ-
30. mun·eu-ge·er-ĵu-ki-yer-ya-bud-qun-ba-sa-é-gil-ha-ran-sen-
31. šhi-ŋu-ĵi-bu-ĵar-qu-la-t' u-qayi-sen-šhi-ŋu-dun-é-gil-ha-ran-
32. lu·a·eu-gu-lel-du-k' un·eu-ges·'a-nu-beo·e-su-t' eu-šig-
33. deg-sed-sen-šhi-ŋu-dun·'eo-t' eo-gus-ba-la-qa-dun-no-yad-lu·a-
34. qam-t' u-ĵar-qu-la-ĵu-qa-qal-t' u-qayi-sen-šhi-ŋu-dun-yo-su·ar·'eu-
35. lu-ya-bu-qun-ma·uĕ·'euĕ-les·'euĕ-led-k' un-qu-dal-qu-la-qayi-
36. k' i-k' un-sen-šhi-ŋu-ĵi-ba-la-qa-dun-da-ru-qas-da-no-yad-da-t' a-ha·ul-
37. ĵu·'eog-t' u-geĕ-é-ne-ba-sa-li-[ti]-dĕm-t' eu-šig-de-be-é-le-g·e-
38. ĵu-yo-su·'eu-ge·uĕ·'euĕ-[e]s-bu·'euĕ-led-du-geĕ·'euĕ-le-

39. du·e-su-----
 40. bi-da-na-'eo-č' id-k' un-k' er-ber-g·e-run-----
 41. bi-da-u-qad-ĵe-----御寶-----
 42. ĵar-liq-ma-nu-lu-ĵil-'eu-bu-lun-dum-da-du-za-ra-yin-t' a-bun-
 43. -----šī-ne-de-tay-du-da-bu-guê-dur-bi-č' i-beê

ふつうパスパ文字による文は、一音節毎に連結線を用いて連書されるのであるが、本碑文は連書が不完全となる傾向にある。特に **ᠷ** r と **ᠡ** e の前後で切断される場合が多い。音節と音節の間は余白があるけれども、その余白が少なく取られることもあり、連書が不完全であることと合わせて、音節の切れ目であるのか否かが不明瞭となる場合がある。例えば t'am-qa (21 行) や baq (22 行) はそれぞれ-t'-m-q-、-b-q-とあり単語を知らなければ音節の切れ目が分からない。このような個所が随所にある。

さて、これは『KOTONOHA』24 号(注 5)で述べたことであるが、パスパ文字モンゴル語聖旨の初頭三行の定型句には多めの余白「-----」による意味の区分に対応した分かち書きの型が幾つかみられる。Ⅰ型(3 行目だけを分かち書きする)、Ⅱ型(1、2、3 行を共に分かち書きする)、Ⅲ型(分かち書きしない)というものである。本碑はこのうちⅢ型(分かち書きしない)に相当する。

なお、27 行と 28 行の間上方部分および 41 行下方部分に、漢字で縦に「御寶」とあることについては周知のことであろう。

3. 字形

本碑のパスパ文字の字形につき気の付いた点が幾つかある。ここで解決のつかない問題も、他の資料との比較対照により意味を見いだすことができるかもしれず、細かいことであってもいちいち記すこととした。

ア. ᠡの字形は主に **ᠡ** (音節中は **ᠡ**) である。それ以外に、中央の横線が右から左に下る斜線となっているもの、**ᠡ** (**ᠡ**) も幾つかある。縦に棘のある **ᠡ** / **ᠡ** (**ᠡ** / **ᠡ**) は確認できない。

イ. š はモンゴル語と漢語の全ての例に渡って **ᠰ** とする。漢語の精密な表記では、禅母字を **ᠰ** š1 とし審母字を **ᠰ** š2 とし、両者区別するけれども、本碑文にはそのような区別はない。15 行目の西蜀 si-šeu の「蜀」は禅母、26 行目ほか 10 箇所に見える先生 sen-šhi-ᠵud 等の「生」は審母であるけれども、区別無く **ᠰ** š とする。

ウ. ha は 4, 19, 30, 31, 36 行に合計 5 ツ現れる。h はふつう **ᠬ** であるが、本碑では **ᠬ** のように最後の止めがやや縦に伸びているところに特徴がある。

エ. n の字形は概ね **ᠨ** である。6 行目 yor-č'i-qun の音節末の n が **ᠨ** のように見える。

後者は一例のみであり採拓の具合によるものかもしれず、ここでは詳説しない。

オ. n の規範的な字形は𐰽であり、曲線部分は閉じている。28 行目'a-nu の音節初頭の n が𐰽のように僅かに開いている。後者は一例のみであり、これも採拓の具合により墨が入り開いているように見えるだけかもしれず、ここでは詳説しない。

4. パスパ文字漢語

漢語をパスパ文字で音写したパスパ文字漢語及び対応する漢字漢語を列挙すると以下のとおりである。

先生 = sen-šhi-ṅud (8-9, 26, 27, 29 行) sen-[š]hi-ṅu (15 行) sen-šhi-ṅu (30-31, 31, 33, 34, 36 行) sen-šhi-ṅun (27 行)、李道謙 = li-tav-k'em (14 行)、高真人 = gav-ṅi[n]-ži-nu (14 行)、提點 = [t]i-dēm (14 行)、陝西 = [š]em-[s]i (14 行)、五路 = u-lu (14-15 行)、西蜀 = si-šeu (15 行)、四川 = shi-č'eon (15 行)、李提點 = li-ti-dē[m] (16 行) li-[t]i-dēm (28 行) li-ti-dē-mun (29-30 行) li-[ti]-dēm (37 行)、宮觀 = geuṅ-gon (17, 19, 21 行)、解典庫 = gey (gīay) -den-k'u (22-23 行)、店 = dem (23 行)、大都 = tay-du (43 行)。

以上、漢字 25 種、重複を数えた延べ数 62 の内、『蒙古字韻』と一致しないものは、5 種延べ数 5 となる。以下、『蒙古字韻』と一致しないものを中心に検討する。なお、先に述べたように『蒙古字韻』では禪母字 𐰽 ṣ1 と審母字 𐰽 ṣ2 を区別するため、厳密には本碑と異なるけれども、この点については ṣ で翻字し言及しない。なお、説明の便宜のため用例は順不同とする。

ア。「先生」の「先」は sen であり『蒙古字韻』と一致する。なお、「安西王マンガラ鼠年 (1276) 令旨」は三例とも sēn とする (注 6)。

イ。「解典庫」の「典」は den であるが、『蒙古字韻』は dēn (下 9a-9) とする。



ウ。「陝西」の「陝」は[š]em であるが、『蒙古字韻』は šēm (下 23a-2)、より正確には š2ēm とする。

エ. 漢語訳「店舎」は dem (旅館) に相当する。dem は「店」の字音である。『蒙古字韻』は dēm (下 22b-1) とする。

上の四つは、ê とするか、それとも e とするかという問題である。『蒙古字韻』によると、ê と e の対立のみにより異なる韻母となるものには四種ある。すなわち-év と -ev、-ém と -em、-ēn と -en、-ê と -e である。どのような条件のもとで ê と e に分かれるのかということであるが、g, k', k, ŋ を声母とする中古音三等の韻母は ê となり、四等の韻母は e となることは確かである。それ以外の声母を持つ音節についてはなかなか難しい。これについて考えがないわけではないが、いま少しパスパ文字漢語の例を集め検討した後のこととして、ここでは詳説しない。もっとも、パスパ文字モンゴル語では、音節初頭で ê が

用いられ、音節中で e が用いられるという傾向にある。「解典庫」や「店」はモンゴル語文に常用される借用語であるから、これらの語に関しては、音節中の e がパスパ文字モンゴル語の慣用に従って e に書き換えられたという可能性はある。

オ。「四川」の「川」はč'eon であるが、『蒙古字韻』はč'üen (下 11a-7) とする。

カ。「解典庫」の「解」は照那斯図 1991、呼格吉勒図・薩如拉 2004 とともに gey とするけれども、gīay のようにも見える。碑文における  e と  i の区別は僅かであり、複数の例がでてこない限り何れであるか判断し難い場合がある。ここでは gey (gīay) としておく。『蒙古字韻』をみると、本文の中では gūay (上 33b-4) とするけれども、総目 (上 7a-7) および韻目 (上 31b-1) では gey とする。もちろん後者の gey が正しい。なお、照那斯図・楊耐思 1987 (注 7) は、パスパ文字資料に gey と gīay の両形のあることを指摘し、gūay を gīay に校訂する。服部四郎 1946 (注 8) も gīay と校訂したけれども、-ey と -īay の何れが妥当であるか、用例を集め検討する必要があるように思う。

5. 漢字音写モンゴル語

モンゴル語を漢字で音写した漢字モンゴル語及び対応するパスパ文字モンゴル語を列挙すると以下のとおりである。

da-ru-qas (5, 36 行) = 達魯花赤、j[i]ŋ-gis (8 行) = 成吉思、q·a-nu (8 行) = 哈罕、ér-k'e·ud (8 行) = 也里可温、daš-[ma]d (9 行) = 達失蠻。

さて、「安西王マンガラ鼠年 (1276) 令旨」は、パスパ文字が至元六年 (1269) に公布されて以降、年代の確定できるパスパ文字モンゴル語資料の最初のものである。それに次いで本碑「クビライ龍年 (1280) 聖旨」がある。前者は q·a-nu を匣罕、ér-k'e·ud を也里克温としており、本碑は哈罕と也里可温としているから些か異なる部分がある。この点につき次に述べる。

ア。「安西王マンガラ鼠年 (1276) 令旨」では、皇帝オゴデイを指すものとして「匣罕」が用いられたが、その後は本碑のように「哈罕」もしくは「合罕」に改められている。さて、q·a-nu の語頭の音節はモンゴル文語の qa に当たるわけであるが、この qa は、『至元訳語』(元代の漢字音写モンゴル語語彙集、蒙古訳語ともいう)では主に「匣」で表記される。もっとも語中において「哈」を用いた例が一つだけある。碑文における「匣」から「哈」や「合」への改変の理由がどこにあるのか、字音にあるのか漢字の意味にあるのか、難しいところである。

イ。ér-k'e·ud の k'e はモンゴル文語の ke に当たるわけであるが、この ke の漢字音写については述べなければならないことがある。長田夏樹 1953 (注 9) によると、元代の『至元訳語』と明代の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』とでは音写法が異なる部分があるという。『至元訳語』では、モンゴル文語の ge に相当する中期モンゴル語音を

「哥」や「箇」で、モンゴル文語の γa に相当する中期モンゴル語音を「葛」で表記する（これより「モンゴル文語の～に相当する中期モンゴル語音」という表現を「文語～に相当する音」と簡略に記す）。同様に、文語 ke に相当する音を「可」で、文語 qa に相当する音を「渴」で表記する。これにより長田夏樹 1953 は、舒声の「哥」「箇」「可」の母音を $[a]$ 、入声の「葛」「渴」の母音を $[e]$ とした。ところが明代の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』では文語 $g\ddot{o}$ に相当する音を「哥」「葛」などで、文語 $k\ddot{o}$ に相当する音を「可」などで音写する。以下は長田夏樹 1953 の論点の一部分をまとめたものである。

	『至元訳語』	『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』
ge	哥箇（舒声）	格
ke	可（舒声）	客
γa	葛（入声）	中合
qa	渴（入声）	中合
gö	一省略一	哥葛（舒声と入声）
kö	一省略一	可〔渴の使用例ナシ〕（舒声）

これは余程面白いことであるが、長田夏樹 1953 によると、『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』等の元代資料及び『元史』は、『至元訳語』の音写法と一致するという。

今、煩雑となることをさけて、「哥」「葛」「格」「中合」のみを例として述べると、上の表を次のように読むことができる。文語 a に相当する中期モンゴル語の音価は現代諸方言からみて広母音の $[a]$ もしくはその若干の変種であったとみて大過ない。所謂女性母音の文語 e に相当する音のほうは難しいけれども、半狭母音の $[e][\ddot{e}][\ddot{e}]$ もしくはその若干の変種ということにしておく。一方、漢語の果摂の諸字「哥」（「箇」「可」）、入声山摂の諸字「葛」（「渴」）、入声梗摂の諸字「格」（「客」）の音は、その現代諸方言をみると多岐に分かれており、中古からの変化の激しさを物語っている。元代音の推定も容易ではない。そこで、元代において、モンゴル語音と漢語音の両者がどのように対応しており、それから予想して、漢語音がだいたいどの様であったかということが問題となる。それで、元代の『至元訳語』では、「哥」は $[k\ddot{a}]$ 、「葛」は $[k\ddot{e}]$ もしくは $[k\ddot{e}ʔ]$ 、「格」は $[ki\ddot{e}i]$ もしくは $[ki\ddot{e}iʔ]$ のようであったとする。そこで、文語 ge に相当する音には中舌母音の「哥」 $[k\ddot{a}]$ をあて、文語 γa に相当する音にはやや広めの中舌母音の「葛」 $[k\ddot{e}][k\ddot{e}ʔ]$ をあてた。なお、「格」の字音は、主母音が適当でなかったか或いは音節末に副母音 $[i]$ があったためであろうか、文語 ge に相当する音を音写するには適さなかった。ところが、明初の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』では「格」は $[k\ddot{a}]$ もしくは $[k\ddot{a}ʔ]$ となっていた。「哥」は $[ko]$ 、「葛」は $[ko]$ もしくは $[koʔ]$ となっていた。そこで、文語 ge に相当する音には「格」 $[k\ddot{a}][k\ddot{a}ʔ]$ をあて、文語 $g\ddot{o}$ に相当する音には「哥」 $[ko]$ と「葛」 $[ko][koʔ]$ をあてた。残る文語 γa に相当する音であるが、これは喉の奥で調音するもので、漢語にとつ

ては特殊な音であったため、工夫を加え「中合」という表記をこしらえた、というところであろう。

本碑は、文語 ke に相当する音を「可」で音写しており、この点は『至元訳語』の方式と一致する。他方の「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」は「克」としている。この「克」は、『蒙古字韻』で k' hij と表記され、『至元訳語』では漢語の「風」（モンゴル文語は kei）の漢字音写モンゴル語として用いられる。これより「克」の字音は[khəi]であったとみてよい。音節末に副母音の[i]を持つ音は、単母音の文語 ke に相当する音の表記には不向きであったのであろうか、蔡美彪 1955（注 10）によると、1276 年のこの令旨の後、1282 年の「アナンダ秦王馬年（1282）令旨」で一度用いらただけで、その他は全て「可」となっている。もっとも、「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」の漢語基礎方言では、「克」は音節末の副母音を落とした発音、すなわち[khə]もしくは[khəʔ]となっていたため、それで文語 ke に相当する音にあてられた、という可能性も皆無ではない。

最後に、いまひとつ複雑な話をしなければならない。『蒙古字韻』はパスパ文字の見出しのもとに、「平」「上」「去」「入」という声調の見出しを更に立て、それぞれの声調のもとに同音となる漢字を収めている。それで、「十四歌」という大きな韻のグループの中のパスパ文字 go という見出しの下を見ると、平声「哥」、去声「箇」、入声「葛」があり、パスパ文字 k'o のもとには上声「可」、入声「渴」が収められている。これよりパスパ文字 go や k'o のもとに収められた漢字の音は、舒声（平上去）も入声も類似したものであったことがわかる。パスパ文字の字面は o であり、それによると漢字の音価も舒声入声共に円唇母音であったように見える。『中原音韻』では音価は分からないけれども、「十二歌戈」をみると、上に挙げた諸字は『蒙古字韻』と同様に声調は異なるけれども同じ韻の扱いとなっている。他方の、『至元訳語』や『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』等の元代資料及び『元史』などは、先に述べたように、舒声の字を文語 ge, ke に相当する音にあて、入声の字を文語 ya, qa に相当する音にあてており、『蒙古字韻』や『中原音韻』とは異なるようにみえる。今問題にしている諸字の扱いについては、『蒙古字韻』と『中原音韻』は、元代の『至元訳語』よりも、明初の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』に近いということになる。これをどの様に考えるか。

いろいろ考えられるけれども、二つだけ可能性を挙げておく。まず一つ目は次のようである。『蒙古字韻』『中原音韻』が、『元朝秘史』『甲種本華夷訳語』と類似しているのは見かけ上のもので、実際は『至元訳語』と大きく異なるところはなかった、という考えである。問題は「十四歌」所収字の音価にある。舒声の「哥、箇」や「可」は[kə]や[khə]のようであった。入声の「葛」や「渴」は[kəʔ]や[khəʔ]のように声門閉鎖音を伴ったやや広めの中舌母音であり、母音[a]に近い聴覚印象を与えるものであった。そこで、

文語 *ge* や *ke* に相当する音には「哥、箇」[kɣ]や「可」[khɣ]をあて、文語 *ya* や *qa* に相当する音にはやや広めの葛[kɛʔ]や渴[khɛʔ]をあてた。『蒙古字韻』はというと、この種の中舌母音を一つにまとめパスパ文字の *o* を以って表記した。こういうことであって、『蒙古字韻』のパスパ文字 *o* は、漢語の[x][eʔ]など中舌母韻に対応していた。

二つ目は次のようである。『蒙古字韻』の *go* や *k'o* のもとに収められた舒声の「哥、箇、可」と入声の「葛、渴」はともに[o][oʔ]のような円唇母音であった。この点は『中原音韻』も同様であったと考えても良い。問題の『至元訳語』や『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』等の元代資料及び『元史』は、『蒙古字韻』や『中原音韻』とは異なる字音の層を反映するものであった。

いずれが妥当か、それともいずれも不可であるか、いま少し元代の漢字音写モンゴル語の例などを精査し検討しなければならない。

注

- 1) 杉山正明 1990, 「元代蒙漢合璧命令文の研究(一)」『内陸アジア言語の研究V』神戸市外国語大学, pp. 1-32. p. 25 参照。
- 2) 呼格吉勒図・薩如拉 2004, 『八思巴字蒙古語文献彙編』内蒙古教育出版社. pp. 32-47、図版 § 04-1 (モンゴル文)、04-2 (漢語) 参照。
- 3) この翻字案は「言語文化接触に関する研究」(AA 研. 平成 12 年 3 月 24 日)で公表し、その後改訂を加えたものである。
- 4) 照那斯圖 1991, 『八思巴字和蒙古語文献 II 文献匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1991 年. pp. 21-28 参照。
- 5) 吉池孝一 2004, 「パスパ文字モンゴル語聖旨の初頭定型句の分ち書きについて」『KOTONOHA』24 号 (2004.11.28) pp. 11-16。
- 6) 吉池孝一 2005, 「安西王マンガラ鼠年 (1276) 令旨のパスパ文字」『KOTONOHA』33 号 (2005.8.28) pp. 22-28。
- 7) 照那斯圖・楊耐思 1987, 『蒙古字韻校本』民族出版社. p. 168 参照。
- 8) 服部四郎 1946, 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂. pp.42-45 参照。
- 9) 長田夏樹 1953, 「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第 4 巻第 2・3 号, pp. 91-118. p. 97 参照。
- 10) 蔡美彪 1955, 『元代白話碑集録』北京: 科学出版社. p. 30 参照。